

令和 4 年 6 月 24 日現在

機関番号：32305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12243

研究課題名(和文) 乳がんを持つ母親と思春期女子の対話を基盤にした支援モデルの介入と評価

研究課題名(英文) Intervention and evaluation of support models based on dialogue between mothers with breast cancer and adolescent girls

研究代表者

藤本 桂子 (Fujimoto, Keiko)

高崎健康福祉大学・保健医療学部・講師

研究者番号：80709238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法および支援ニーズを明らかにした。(乳がん患者と思春期の子どもに関する海外研究の動向、藤本 桂子、日本看護研究学会雑誌43巻3号Page562(2020.09)、乳がん罹患した母親と思春期の子どもの体験に関する海外研究の動向、藤本 桂子、小沼 美加、神田 清子、高崎健康福祉大学紀要20号 Page17-28(2021.03))

乳がんを持つ母親と思春期女子の体験を明らかにした。(乳がん患者を親に持つ思春期女子の体験、藤本 桂子、神田 清子、日本がん看護学会誌32巻Suppl. Page261(2018.01))

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法および支援ニーズが明らかになった。また、乳がんを持つ母親と思春期女子の体験が明らかになった。これらのことから、母親役割を持つがん患者が安心して治療を受けるための支援に対する重要な示唆を得た。また、得られた結果は、今後、再発・転移乳がん患者や遺伝性乳がん患者である母親と子どもへの看護支援を見出す手掛かりになるためと考える。

研究成果の概要(英文)：It revealed the difficulty, coping strategies and support needs for mothers with breast cancer to convey information about their illness to adolescent girls. (Trends in overseas research on breast cancer patients and adolescents, Keiko Fujimoto, Journal of the Japanese Society of Nursing Research, Vol. 43, No. 3 Page562 (2020.09), Trends in overseas research on experiences of mothers with breast cancer and adolescents, Fujimoto Keiko, Mika Onuma, Kiyoko Kanda, Bulletin of Takasaki University of Health and Welfare No. 20 Page17-28 (2021.03))

He revealed the experiences of mothers with breast cancer and adolescent girls. (Experience of adolescent girls with breast cancer patients, Keiko Fujimoto, Kiyoko Kanda, Journal of Japanese Society of Cancer Nursing, Vol. 32, Suppl. Page261 (2018.01))

研究分野：がん看護

キーワード：乳がん 母親 思春期 子ども 体験

## 1. 研究開始当初の背景

今や乳がんは、日本人女性の 12 人に 1 人が罹るがんであり、その罹患率は 30 代から増加し始め、40 歳代後半から 50 歳代前半にピークを迎え、他のがんに比べ比較的若い世代で多くなっている(独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報サービス)。また、近年の日本において、30 代から 40 代の患者には中高校生いわゆる思春期の子どもを持つ女性が多いことが推察される(一般財団法人厚生労働統計協会)。

思春期にある子どもの特徴として以下の内容が挙げられ、精神的・身体的に親からの自立心が芽生え、物理的・心理的にも親との距離を取り始める時期である。

また、乳がんの遺伝性が有名になったことにより、遺伝性の有無に関わらず乳がんと診断された患者とその子どもは遺伝性乳がんの懸念を持つことが多く、告知を受けた母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることが非常に困難になっている。さらに、米国女優アンジェリーナ・ジョリーが遺伝子検査を受け、乳房の切除・再建手術を受けたことで遺伝性乳がんも注目されてきている。

そのような状況にある母親が病気に伴う情報を子どもに伝え、オープンなコミュニケーションをとることは、安心して治療を受ける環境づくりの第一歩である。欧米諸国ではがん患者と子どものコミュニケーションに関する教材や支援モデルの開発が進められているが、家族背景や生活スタイル、社会的風土が異なることから、それらの教材や支援モデルをそのまま日本に適応させることはできず、これらを改善し、世界に通用する支援モデルの開発が急務である。

欧米では、患者を親に持つ子どもへの病状説明に関するガイドラインの作成が開始されており、「Talking with your children about breast」など参考となる出版物もある。また、欧米における先行研究として、Shands や Jacqueline の研究があり、乳がん患者が病気に伴う情報を子どもに伝えることに関して抱える葛藤や、医療者に求められる支援について明らかになっている。しかし、対象となった患者の家族背景や生活スタイル、社会的風土などが我が国の状況と異なることも多い。

また、日本国内においても根本と内山による先行研究があり、子どもへの告知の状況とその反応や、子どもにがん伝えることに関する母親の苦悩が明確となっている。しかし、親からの自立心が芽生える思春期の子どもを持つがん患者や乳がんの遺伝性を恐れる患者と子どものコミュニケーションについて調査された研究はない。

そのため、乳がんの告知を受けた母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝え、オープンなコミュニケーションを再獲得する現象と支援ニーズの明確化と、その根拠に基づく支援モデルの開発・介入・評価を行う応募者の研究は、独創性が高く、母親役割を持つがん患者が安心して治療を受けるための支援の重要な部分を担っていると考える。また、得られる結果は、今後、再発・転移乳がん患者や遺伝性乳がん患者である母親と子どもへの看護支援を見出す手掛かりになるためと考える。さらには乳がん以外のがんを患う患者に対する支援や、子ども以外の家族員、社会生活における重要他者とのコミュニケーションへの支援の一助となることも有用であると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、母親と子ども相互の体験から明らかになった研究成果を活かし、乳がんを持つ母親と思春期女子のオープンなコミュニケーションを基盤にした情報提供と情緒サポートのための支援モデルを作成する。また、モデルによる介入とその評価を行うことである。

## 3. 研究の方法

### 1) 研究目的を達成するための具体的な研究計画・方法

全ての段階においてがん看護及び質的研究に精通した研究者数名にスーパーバイズを受ける。

#### 【平成 29 年度の計画】

Stage : 乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法および支援ニーズの明確化

- (1) 2013 年の調査で明らかになった「乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法」から支援ニーズの明確化を行う。その際、以下の 3 点について関連性を十分検討する。

家族機能

壮年期女性の発達課題

思春期(中学生・高校生)女子の発達課題

Stage : 乳がんを持つ母親と思春期女子の体験による相互作用の分析

- (1) 乳がんを持つ母親と思春期女子が告知から初期治療までに体験する内容とその相互作用について分析を行う。

対象者：研究実施施設に通院する乳がん患者とその子ども(告知時に中学生もしくは高校生で、調査実施時に高校生以上である)各 20 名

調査方法：母親(患者)と子ども、それぞれ個別に半構造化面接を行う。

母親と子どもの体験とその相互作用について分析する。

Stage :「乳がんを持つ母親と思春期女子の対話」の概念分析による必要な要素の抽出

- (1) Web 版医学中央雑誌及び Pub Med を使用し、「乳がん」「娘」「対話」をキーワードとして原著論文の検索を行う。
- (2) 得られた論文から、「乳がんを持つ母親と思春期女子の対話」に関する概念分析を行い、支援モデルの作成と評価に必要な要素の抽出を行う。

【平成30・31年度の計画】

Stage : 支援モデルの作成と臨床的適合性の確認

- (1) Stage・Stage・Stage で得られた要素をもとに、支援モデルの原案を作成する。
- (2) 作成したモデル原案の臨床的適合性を確認する。
- (3) 支援モデルの介入方法(実施施設・対象者・介入者・介入時期と方法など)を検討し、倫理審査を受審する。

Stage : 支援モデルによる介入の臨床的効果の判定

- (1) 支援モデルによる介入を行う。介入により対象者に身体的・精神的負担がないかどうかを適宜確認する。
- 2) 介入による臨床的効果を判定する。

原案モデルに基づき、施行した支援の有効性を評価し、有効性の高い支援モデルの開発を目指す。評価視点は、「家族の親密性を高める介入」「自己効力感を高める介入」「思春期のアセスメントと伝え方への教育的介入」「情緒的支援としての傾聴」など、Stage の概念分析で得られた要素も含め検討する。また、面接により「自己効力感」や「夫婦間の伝え方の合意」などを含む主観的評価を行い、「VAS」「自己効力感」などの尺度を用いた客観的評価も参考とする。

#### 4. 研究成果

Stage : 乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法および支援ニーズの明確化について海外文献レビューを行い、海外での支援ニーズについても明らかにした。

< 研究結果 >

PubMedで「breast cancer」「adolescence」「nursing」をキーワードに論文を検索した結果、500件の文献が該当した。その中で、乳がん罹患した母親と思春期の子どもの体験に関する論文を抜粋し、対象者の概要や主な結果などの項目について分類した。分析は、各項目の度数分布の算出や内容の類似性に基づく帰納的分類を行った。診断時に思春期であった子どもまたはその親のみを対象にした文献は見あらず、思春期を含む子どもとその母親を対象としている文献を対象文献とした。対象文献13件中、乳がんのみに焦点を当てた研究は12件で、対象者は母親のみが4件、子どものみが6件、その他が3件であった。母親の診断から調査までの月数は幅広く、3年以内は2件のみであった。がん診断時の子どもの発達段階は「学童期・思春期」が6件で最も多く、他に発達段階が限定されていたのは「思春期・成人期」の1件のみであり、その他は「思春期」を含む幅広い発達段階の子どもを対象としていた。主な調査結果は、(1)母親の体験として、BRCA1/2 陽性結果を子どもに開示するかどうかの意思決定やがんが母子関係に及ぼす影響などがあり、(2)子どもの体験として、思春期を含む子どものがんやがんの治療に対する理解度、子どもにとっての母親の重要性などについて調査されていた。(3)母親・子ども双方の体験として、母親と子どものコミュニケーション方法や乳がんの感情的な影響から子どもを保護する様々な方法について明らかにされていた。本研究により、13件の文献から乳がん罹患した母親と思春期の子どもの体験が明らかになった。しかし、13件の文献は全て、対象者に思春期以外の年齢の子どもを含んでいた。そのため、今後は対象者を「思春期」に限定した調査が必要であり、明らかになったことをもとに発達課題を踏まえた情報提供やコミュニケーション支援方法の開発が求められている。(乳がん患者と思春期の子どもに関する海外研究の動向、藤本 桂子、日本看護研究学会雑誌(0285-9262)43巻3号 Page562(2020.09)、乳がん罹患した母親と思春期の子どもの体験に関する海外研究の動向、藤本 桂子、小沼 美加、神田 清子、高崎健康福祉大学紀要(1347-2259)20号 Page17-28(2021.03))

Stage : 乳がんを持つ母親と思春期女子の体験による相互作用の分析を行い、思春期女子の体験を明らかにした。

< 研究結果 >

対象者は、患者の診断・告知時に中学生または高校生であった女子9名。「母親のがんを知った時から初期治療までに体験したこと」について、半構成的面接法によりデータ収集を行った。分析は Krippendorff の手法により質的帰納的分析を行った。【結果】対象者9名の平均年齢は17.6±1.51歳、告知時の発達段階は中学生3名、高校生6名であった。初期治療開始からの平均期間は平均23.3±9.35カ月であった。乳がん患者を親に持つ思春期女子の体験は、【母から伝えられる病気の情報】【母のがん罹患により生じる気持ちの揺らぎ】【母や家族の思いを推察】【がん情報の獲得行動】【家族や友人、親戚からのサポート】【母のがん罹患に対する自分なりの意味づけ】【母の治療と自分の生活を調整】【母のがんを通し

て起こる知識・考え・行動の変化】【がんに対して持つ多様なイメージ】【罹患後に影響を与える知識と環境】の 10 の大表題に集約された。【考察】乳がん患者を親に持つ思春期女子は、母から病気の情報を伝えられることにより気持ちの揺らぎや家族の思いの推察を体験する。しかし、情報の獲得や周囲の人々のサポートにより母のがん罹患に対する自分なりの意味づけを行い、生活の調整や知識・考え・行動の変化を起こすことが明らかになった。これらの体験を十分理解した上で、それぞれの家族がありのままの姿を保ちながら、それぞれの発達課題を遂げられるよう支援することが必要であり、母親である患者が安心して治療に受けるためにも重要な支援である。(乳がん患者を親に持つ思春期女子の体験、藤本 桂子、神田 清子、日本がん看護学会誌(0914-6423)32 巻 Suppl. Page261(2018.01))また、現在、海外雑誌への投稿準備中である。

Stage : 「乳がんを持つ母親と思春期女子の対話」の概念分析による必要な要素の抽出については現在、着手中である。

Stage : 支援モデルの作成と臨床的適合性の確認および、Stage : 支援モデルによる介入の臨床的効果の判定については今後の課題である。

意 義: 上記研究を行い、母親役割を持つがん患者が安心して治療を受けるための支援に対する重要な示唆を得た。また、得られた結果は、今後、再発・転移乳がん患者や遺伝性乳がん患者である母親と子どもへの看護支援を見出す手掛かりになるためと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藤本桂子、小沼美加、神田清子	4. 巻 20号
2. 論文標題 乳がんに罹患した母親と思春期の子どもに関する海外研究の動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高崎健康福祉大学紀要	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤本 桂子
2. 発表標題 乳がん患者と思春期の子どもに関する海外研究の動向
3. 学会等名 日本看護研究学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤本桂子、神田清子
2. 発表標題 乳がん患者を親に持つ思春期女子の体験
3. 学会等名 日本がん看護学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	神田 清子  (Kanda Kiyoko)  (40134291)	高崎健康福祉大学・保健医療学部・教授    (32305)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------